

『陶山社祭礼の略図』の源氏車を引いている場面

# 陶山社 祭礼の絵巻



陶山神社のおくんちの絵巻

資料館には「陶山社 祭礼の略図」という絵巻物があります。明治18年（1885）本幸平がおくんちの神事区のとて、注連元の田代呈一が記念に作りまし。絵巻物には祭礼の道具を運ぶ人、神輿を担ぐ人、山車を引く人などが行列になって、陶山神社へ向かっている様子が描かれています。

このほかにも陶山神社のおくんちを描いた絵巻風のものがあり（左図）、町内の方が所有しています。いつごろ作られたかは記されていませんが、祭りの様子や風俗などが明治18年の絵巻物と良く似ており、そんなにかげ離れた時期のものではないようです。

今年は3区（幸平・大樽・赤絵町）が神事区です。絵巻に出てくる源氏車はもともと3区に伝わっており、今年のおくんちの行列に加わることになっています。

# 皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報

No.33

5言国入山皿



# 川原忠次郎

江戸時代初期有田で磁器が作られ始めて以来、有田焼は手作りが主流でした。そのようななかで明治13年（1880）に設立された精磁会社は、生産工程全てに機械を導入しています。導入された機械は当時窯業の先進地、フランスのリモージュの最新式のものでした。有田では職人1人が1日100枚しかできない7寸（約20～24cm）の円形皿が、新しく導入された機械では500枚作れました。

精磁会社の機械の導入には川原忠次郎が深く関わっています。忠次郎は精磁会社の製品を出品し販売するため、明治16年（1883）オランダのアムステルダム万国博覧会に参加し、このとき機械の購入を契約しています。忠次郎は機械で大量生産を行うことによって低価格で、なおかつ高品質の有田焼を作ることを目指していたのでした。

忠次郎が機械を導入しようとした明治16年ごろ、日本は不景気で精磁会社も例外ではありませんでした。会社の役員は資金もままらない状況で機械を購入することに、激しく反対しました。

それに対して忠次郎は「吾（われ）既に購入を契約す。然るに今に及んで破棄するは、独り吾（わ）が会社の不信義のみならず、延びて日本帝国の恥辱なり」（肥前陶磁史考より）と論じ、一步も譲りませんでした。そこで社長の手塚亀之助は政府と交渉し、機械は一度政府が買い上げて精磁会社に払い下げるということで決着しました。

忠次郎は嘉永2年（1849）4月、酒造家の父・川原善之助、母・ますの四男として大樽に生まれました。生家は今の有田町商工会議所から深川製磁にかけての一带であったといえます。忠次郎の幼少期のことは明らかではありませんが、学問を好み儒学者谷口藍田のもとで学んだともいわれています。忠次郎は学問だけでなく兄・善八を助け、家業の酒造りや柞灰（ゆすばい）の販売なども手伝っていたようです。

明治3年（1870）有田郡令は伊万里商人の買った



▲明治6年（1873）ウィーン万博の伝習生  
川原忠次郎は最後列の左から3番目。

たきを防いで窯焼の自立を助け、販売制度を改革することを目的として伊万里商社を設立しました。伊万里商社はさらに東京商社、横浜商社、長崎商社も開設しています。忠次郎は横浜商社の主任として抜擢されました。わずか22歳のころでした。

明治6年（1873）忠次郎はオーストリアのウィーン万博に参加します。このウィーン万博は明治政府が初めて参加したものです。政府は陶磁器、建築、染色、製糸、機械などの各分野においてヨーロッパの新しい知識を吸収しようと、当時の権威者を伝習生（研究員）として振当てました。忠次郎もそのなかの陶磁器伝習生の一人でした。ほかの陶磁器伝習生と共にヨーロッパの窯業地で先進技術の習得に力を注ぎました。

忠次郎は、帰国後いち早く有田で石膏模型の製法、匣鉢重積法、水銀使用法などヨーロッパの先進技術を指導しています。有田に石膏型による流し込み法を最初に伝えたのも忠次郎でした。ほかの産地に比べて有田は、機械ろくろや匣鉢の製造法などで、著しい発達をしました。

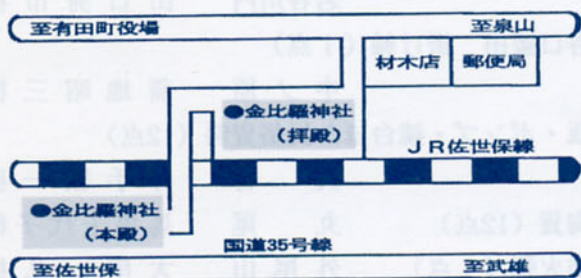
明治18年（1885）38歳のころ忠次郎は重い病気をわずらいました。精磁会社に機械を設置する明治19年ころは寝たり起きたりの状態まで回復していたものの、仕事をするには十分な体ではありませんでした。静養を勧める周囲の声をおして、先頭にたって機械を設置する作業を指揮し、すべての機械の試運転が終わるまで日夜仕事に励んだといえます。機械の運転が開始されて2年後の明治22年（1889）1月、忠次郎は41歳でこの世を去りました。

江戸から明治という大きな時代の変化のなかで、忠次郎は有田焼の近代化に力を注いだ指導者的な存在だったといえるのではないのでしょうか。しかし、早い死でありました。（青野千舟）



# 皿山人の信仰

## — 金比羅神社 —



金比羅といえば香川県琴平町の金刀比羅宮が有名で、金比羅大権現が祀られています。金比羅大権現は海の安全を守る神として、室町時代以来漁民や船乗りなどから厚い信仰を受けています。室町時代から江戸時代にかけては金比羅参りが盛んになり、各地に金比羅大権現が祀られました。

有田にも泉山、赤絵町、黒牟田、下南川原など金比羅神社が何か所かあります。金比羅神社といっても、社殿は木造から石造まで様々です。今回は赤絵町の氏神である金比羅神社についてご紹介します。



▲赤絵町金比羅神社本殿

有田郵便局隣の蒲地材木店横には細い坂道があります。その坂道を登っていくと、赤絵町の金比羅神社です。赤絵町の金比羅神社には礼拝を行う拝殿と神を安置する本殿があります。坂道を登ってすぐに木造の拝殿があり、拝殿横の階段をあがった小高い山の頂上に石造の本殿があります。

金比羅神社は毎年4月10日と8月10日にお祭りがあります。その日には陶山神社の宮司さんが金比羅神社に来て赤絵町の安全を祈願します。

4月10日のお祭りは、地区の人たちが集まってお

寿司やお魚を食べながらお花見をします。8月10日の赤絵町の祇園は地区の役員がお世話をして、金魚すくいやくじ引きなどのお店をだし、戦後まもないころまでは地区の人たちがお芝居をしたり、歌を歌ったり、踊ったりして賑わっていたそうです。今も赤絵町の人たちは各班で当番を決め、毎月9日か10日に金比羅神社を掃除し、大切に祀っています。

この金比羅神社がいつ祀られたのか今のところわかりません。しかし、本殿の囲いには「嘉永元年申十月吉日」と刻まれています。ほかのものにも年号が刻まれています。読めるものなかでは嘉永元年(1848)が一番古いものです。このころにはすでに金比羅神社があったことは確かなようです。



▲安政6年(1859)『松浦郡有田郷図』金比羅神社付近

赤絵町の金比羅神社は安政6年(1859)の『松浦郡有田郷図』には、「金ヒラ社」と記されています。金比羅神社の本殿の位置は安政6年(1859)ころから、今とほとんど変わっていないようです。

本殿の囲いには「嘉永元年 申十月吉日」のほか、赤絵町らしく「□中長十 北島勝助 富村森□郎 今泉平兵衛 光岡□吉 北島□□郎 辻友吉」など、当時赤絵屋を営んでいた人たちの名前もみられます。

有田焼も現在ではトラックなどの陸上輸送が主流ですが、それ以前は伊万里港から日本各地へ、長崎の出島から世界へ海を渡って運ばれていました。陶磁器のように重くてかさばるものを一度にたくさん、安全に運ぶには海上輸送が適していたのです。しかし、その途中には嵐に巻き込まれたり、ほかの船に襲われたりして沈没することもありました。

有田は海に面していませんし漁民や船乗りの町ではありませんが、有田焼を通じて海や金比羅神社と結びつきがあるようです。海上輸送の安全は皿山の人たちにとって日常の生活から切り離せないものだったのではないのでしょうか。

(青野千舟)

## 皿山探訪



# 焼物づくり 今昔

## 染付有田皿山職人尽し絵図大皿

### 7. 釉薬かけ

絵付けを終えると次は「釉薬かけ」です。釉薬は素地の上から掛けるので、上薬（うわぐすり）ともいいます。

釉薬は素地に液体が染み込むのを防ぎ、強度を増大させます。また、素地の表面をつややかに美しくする効果もあります。長石、石灰石、柞（ゆす）の木の灰などを精製してつくられ、焼きあげると表面がガラス質になります。

作業工程は江戸時代も現代も基本的に同じです。まず製品のほこりを払い、次に釉薬を掛け、乾燥させます。

製品のほこりを払うには、かつては竹の先に鳥の羽毛をつけた「鳥（とい）ぼうき」を用いました。

釉薬をかけるには、普通「かけ鉢」と呼ばれる大鉢に浸しましたが、流し掛けや刷毛で塗る方法もありました。

大きなものや重いものなど、かけ鉢に浸すことが難しい製品などはろくろも使い、その回る力を利用して作業の効率化を図りました。

現代ではこのような手法のほかに、スプレーによる釉薬かけも行われています。

釉薬をかけ終えた製品は、「さら板」に乗せ「とんぱん」と呼ばれる棚に置き、十分に乾燥させてから本焼きへと進みます。



▲『染付有田皿山職人尽し絵図大皿』の釉薬かけ  
中央の女性は皿を釉薬に浸している。

# お知らせ

## ◇寄贈資料紹介◇

◆色絵鳳凰草花文大壺一對（2点）

岩谷川内 山口秀市様

◆谷口藍田 掛け軸（1点）

中ノ原 蒲地昭三様

◆瓶・ポンプ・鏡台ほか民俗資料（12点）

大樽 井手誠一様

◆陶貨（12点）

丸尾 馬場千代子様

◆防火弾（1点）

外尾山 大串弘様

また、梶原茂弘様より来客用としてコーヒー碗5客をいただきました。

ありがとうございました

## ◇新刊図書の紹介◇

■『蕨の里有田の歴史物語』 松本源次著 2000円

■『西日本文化』有田特集 西日本文化協会編

500円（町民 400円）

資料館と美術館で販売しています。



## 呉須の唐草

4月に有田にきました。右も左もわからない有田での生活は無我夢中で、気がつくともう9月。あっという間の5か月間でした。これから、有田町の歴史や文化、そしてみなさんと深くかかわっていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

（舟）

## 皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報 No.33

発行年月日 \* 平成8年9月1日

編集・発行 \* 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4番1号  
TEL(0955)43-2678 FAX(0955)43-4185

## 街角の歴史